

# Career Theory

for IT ENGINEER

転職 DRAFT

ITエンジニアのためのキャリア論

転職ドラフトが提唱するITエンジニアの先進性を踏まえたキャリア理論



# はじめに

昨今のキャリアを取り巻く環境は、急速に変化しています。

「人材の流動性が高まり、一つの会社内だけでキャリアを積むことは稀になった」

「VUCAの時代と言われるように、仕事や人生を計画的に進めることが難しくなった」

「報酬だけでなく、やりがいや自己実現も重視されるようになった」

こうした変化に合わせて、キャリア理論のトレンドも変化してきています。

「社内でのキャリア構築だけでなく、転職や学び直しも重視」

「緻密な計画よりも、変化への柔軟な適応を重視」

「客観的な適性だけでなく、本人の主観的な満足感も重視」

特に、ITエンジニアは技術や仕事の変化が激しく、

フルリモートの普及や、フリーランス・複(副)業という働き方も一般的になっています。

それゆえ、従来のキャリア論では適切に語れない点が多くあると感じています。

転職ドラフトでは、組織に依存しない個人にフォーカスした

「バウンダリーレスキャリア論」を軸としながら、

ITエンジニアの先進性を踏まえたキャリア理論を提唱しています。

転職ドラフトが提唱するキャリア論を通して、ITエンジニアがキャリアの悩みを解消し、

次なるキャリアへと繋げられる一助となれば幸いです。

# 1. ITエンジニアの「3つの先進性」

## バウンダリーレスキャリア

組織や職種の枠組みを越えて仕事を進めることで、キャリアが個人のなかに蓄積されていくと考える「バウンダリーレスキャリア」という概念があります。技術やビジネスの急速な変化に合わせて企業間を移動しながらキャリア形成をした、1990年代のシリコンバレーのIT技術者たちが例として上げられるなど、ITエンジニアのキャリアにおいて親和性が高い理論とされています。その背景には、ITエンジニアにおける「3つの先進性」があると考えられます。

### 01

#### オープンに技術やノウハウをシェアする文化

インターネットやWorld Wide Webに代表されるオープンな技術やデータの活用によって、新しいサービスや事業が次々と生み出されてきました。さらに技術カンファレンスなどでは、企業の枠を超えてエンジニア同士が知識を共有し、議論を深める文化が根付いています。こうした背景から、ITエンジニアにとって「オープンであること」はキャリアや働き方にも大きな影響を与える重要な要素となっており、OSSやミートアップなど、企業の枠にとられないコミュニティ活動が盛んに行われています。

### 02

#### 組織に依存しない技能の習得

従来のものづくりでは大規模な設備や専用の機材が不可欠でしたが、IT領域においては、パソコン1台と比較的少ない投資で開発環境を整えることができます。これにより、個人が独立してプロダクトを生み出して発信することが容易にできるようになりました。また、特定の組織や権利に依存しない「オープンさ」に支えられたOSSやAPI、エンジニアコミュニティ、ナレッジ共有サービスなどを活用することで、要素技術を組み合わせながら個人で自由なものづくりを進めることができます。

### 03

#### 共通化された仕事の進め方

Gitなどのバージョン管理やプルリクエストの運用に加え、スクラム開発やCI/CDによる自動化が進んだことで、開発プロセスの標準化とノウハウの共有が広がっています。さらに、アジャイルやウォーターフォールといった開発手法も広く認知され、一般的なフレームワークとして定着しています。

その結果、ITエンジニアは所属企業を移動しても、これまでの経験をそのまま活かしながらスムーズに業務に適応できる環境が整いつつあります。

# 環境変化への適応

ITエンジニアを取り巻く環境は、テクノロジーや社会の発展とともに急激に変化してきました。ITエンジニアにとって「変化に適応していくこと」は、キャリアを考える上で非常に重要なポイントです。テクノロジートレンドを踏まえて、キャリア形成を考えていく必要があります。

## COLUMN テクノジートレンドの推移

### 1990年代 パソコンの普及、ERPの導入拡大

家庭や企業でのパソコンの利用が拡大し、インターネットの一般利用が始まった。プロバイダーの登場により、個人ユーザーもインターネットにアクセスできる環境が整いつつあった。ただし、当時はまだダイヤルアップ接続が主流であり、通信速度の遅さや接続料金の高さが目立った。バブル経済の崩壊を背景に、企業がコスト削減と業務効率化を目的としたIT投資を強化し、ERP(統合基幹業務システム)の導入が進められた。

### 2000年代 インターネットの普及、Web2.0の登場

ブロードバンド環境の整備が進み、ADSLや光ファイバーによって高速インターネットが一般家庭にも広がった。また、携帯向けインターネットサービスも人気を集め、モバイルインターネットの利用が拡大した。Web2.0の概念が登場し、個人がブログ等で情報発信を行うことが一般的となった。一方で、インターネット企業の急成長によりITバブルが発生し、その後の崩壊を経て市場が再編されるなど、日本のIT業界は大きな転換期を迎えた。

### 2010年代 スマートフォンの普及、SNSやソーシャルゲームの台頭

スマートフォンが急速に普及したことで、アプリ市場が急成長。ソーシャルゲームやそのプラットフォームも成長を遂げた。SNSの急拡大に伴い、コミュニケーションの形も大きく変化した。さらに、AWSやMicrosoft Azureをはじめとするクラウドコンピューティングの導入が進み、企業のITインフラも変革を迎えた。ビッグデータとAIの活用が進展し、ビジネスや社会の一部の分野で活用されるようになった。

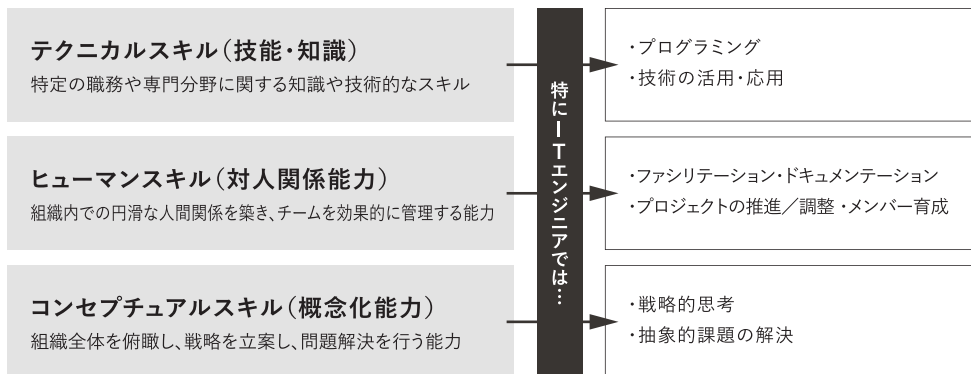
### 2020年代 生成AIの普及、リモートワーク導入

新型コロナウイルスの流行を契機としてリモートワークが急速に普及し、ZoomやTeamsなどのオンラインツールが普及した。会社以外の場所からの業務が増えたため、セキュリティ対策の強化が不可欠となった。また、LLMに支えられた生成AIの台頭により、企業だけでなく個人の生活にも大きく影響を与えた。企業のDXも進み、業務プロセスの効率化やビジネスモデルの変革が求められている。

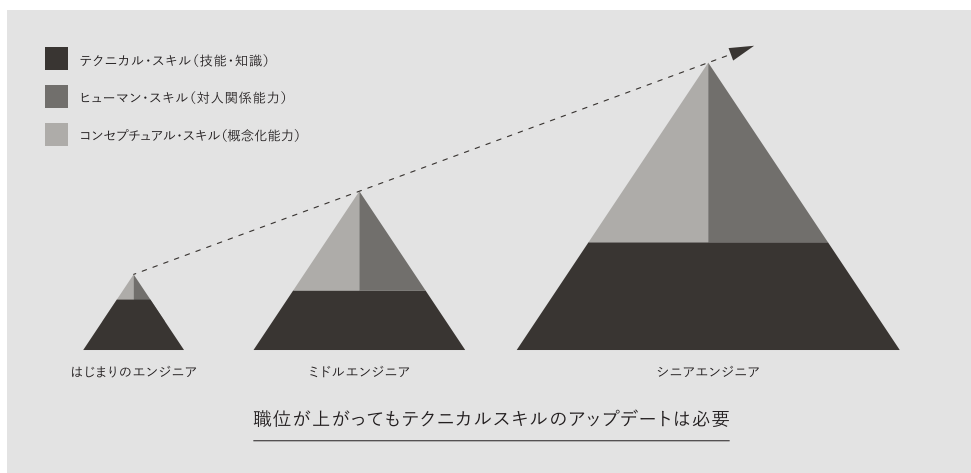
# 2. ITエンジニアキャリアに訪れる「4つの変化」

## 1. 求められるスキルの変化

アメリカの経営学者、ロバート・L・カッツが1955年に提唱した「カッツモデル」では、組織において必要とされる管理職能力を3つのスキルに分類しています。

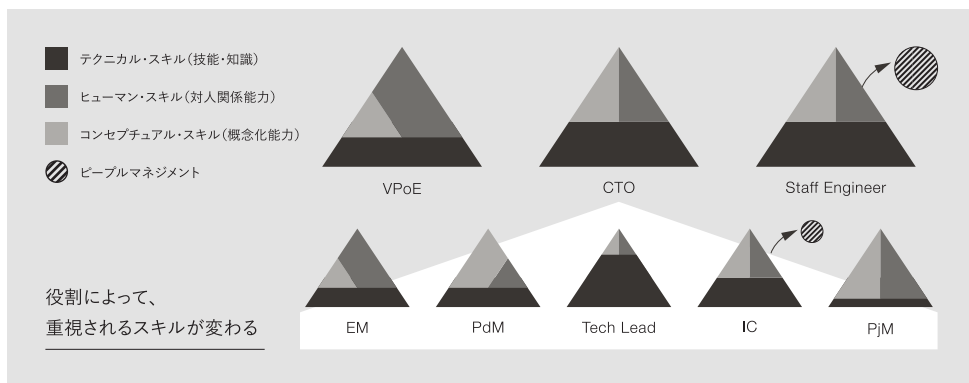


一般的には、職位が上がるほど「コンセプチュアルスキル」の割合が上がり、「テクニカルスキル」の割合が下がると言われています。ただし、ITエンジニアの場合は、ドメインやビジネスモデルに合わせて技術を適切に選択する必要性から、「テクニカルスキル」のアップデートは常に必要です。そのため、最前線で変化していく技術に触れ続ける、いわゆる「手を動かす」という行動は、職位が上がっても引き続き必要とされます。

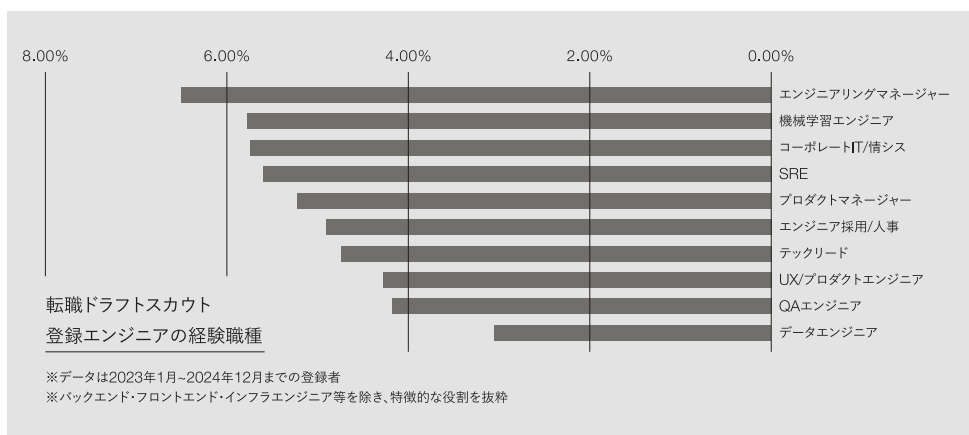


## 2. 求められる役割の変化

組織やサービスが大規模かつ複雑化しているに伴い、ITエンジニアの役割が多様化しています。かつてはプログラマー(PG)→システム・エンジニア(SE)→プロジェクト・マネージャー/プロジェクト・リーダー(PM/PL)と一本道だったキャリアパスも、開発手法や組織論の発展とともに変化し、エンジニアリング・マネージャー(EM)やインディビジュアル・コントリビューター(IC)、スタッフエンジニアなど、新たな役割が提唱されています。

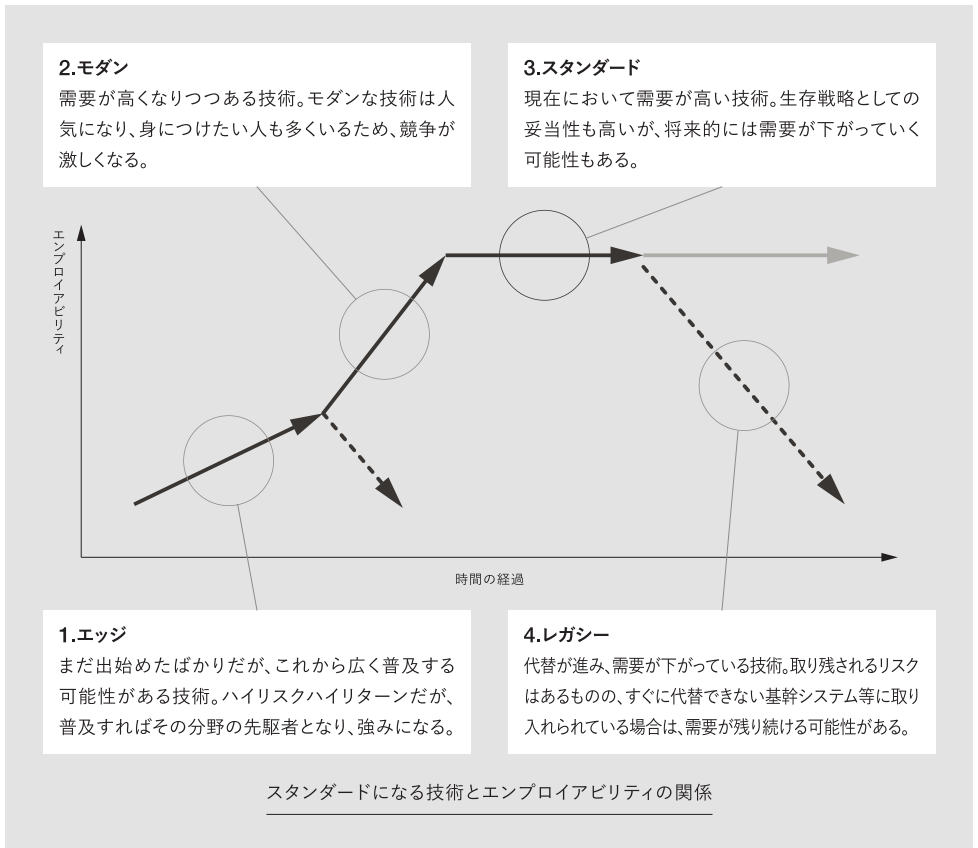


転職ドラフトスカウトに登録しているユーザーの「経験したことのある職種」を見ると、エンジニアリングマネージャー、コーポレートIT/情シス、SRE、プロダクトマネージャーなど、多様な役割の経験者がいることがわかります。



## 3.技術トレンドの変化

人が組織に雇われるための能力を「エンプロイアビリティ」と言います。より多くの組織が必要とする技術・スキルを身につけていると、エンプロイアビリティは高くなります。技術ごとのエンプロイアビリティを時系列で整理すると、大きく4つの段階に分けられます。



「エッジ・モダンな技術を身につけたい」というITエンジニアは多いですが、スタンダードや一部のレガシーの技術の方が、現在のエンプロイアビリティは高いと言えます。一方で、数年後にはエッジ・モダンな技術がスタンダード化し、レガシーの技術のエンプロイアビリティが急激に下がる可能性もあります。どの技術がスタンダードであり続けるかは、ビジネスやテクノロジーのトレンドの変化に大きく依存するため、予測することは困難です。



## 4. ライフステージの変化

2006年に提唱された「カレイドスコープキャリアモデル(KCM)」では、人生において重視したい価値観や項目を3つに分類しています。



個人が自己のキャリアやライフスタイルに対する選択の自由を持てる

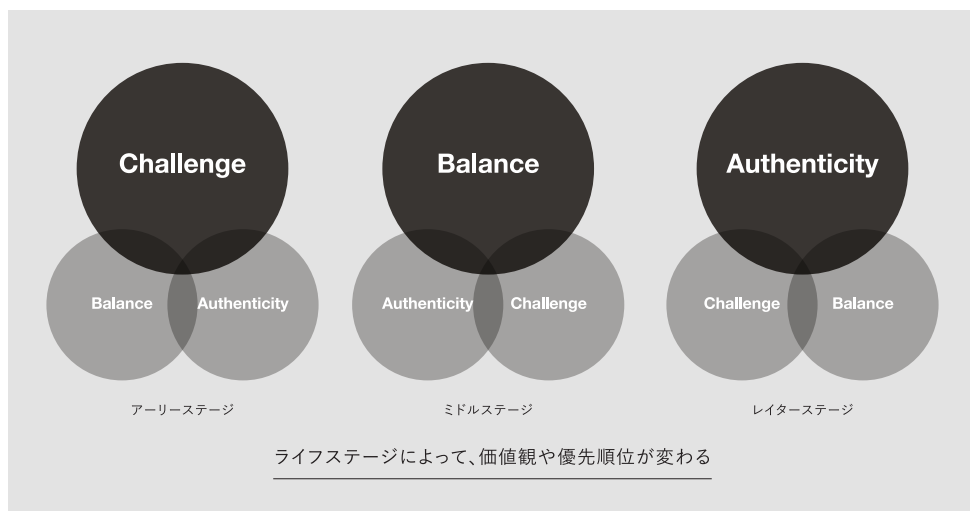


仕事とプライベートのバランスを取るための調整ができる



仕事を、個人の価値観や人生の意味に意義付けられる

カレイドスコープキャリアモデルでは、これらの価値観の優先順位が、ライフステージに合わせて変化することが示されています。いずれ来るライフステージの変化と、それに伴う価値観や優先順位の変化を見据えて、新しい挑戦や転機を検討することが重要です。



# 3. 「探索型」のキャリア設計

## 「逆算型」のキャリア設計の難しさ

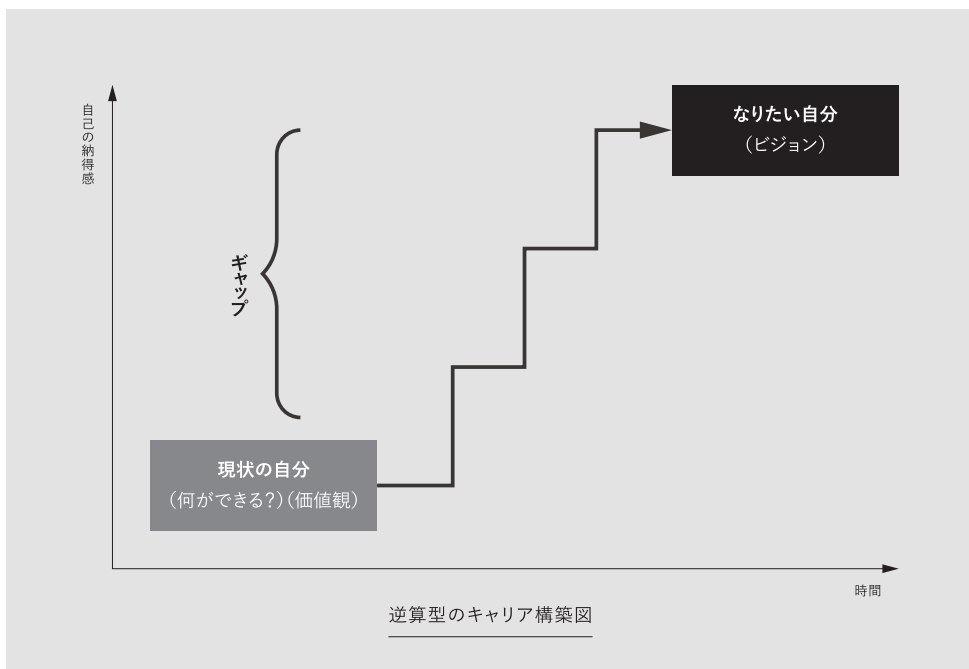
それでは、ITエンジニアのキャリア設計について、具体的に考えてみましょう。

転職ドラフトでは、目標からの「逆算型」で考えるキャリア設計ではなく、「探索型」でキャリアを積んでいく方法を推奨しています。

これまで一般的とされてきた「逆算型」のキャリア構築は、RPGで例えるなら、ひとつひとつミッションをクリアしていく「クエスト型」と言えます。

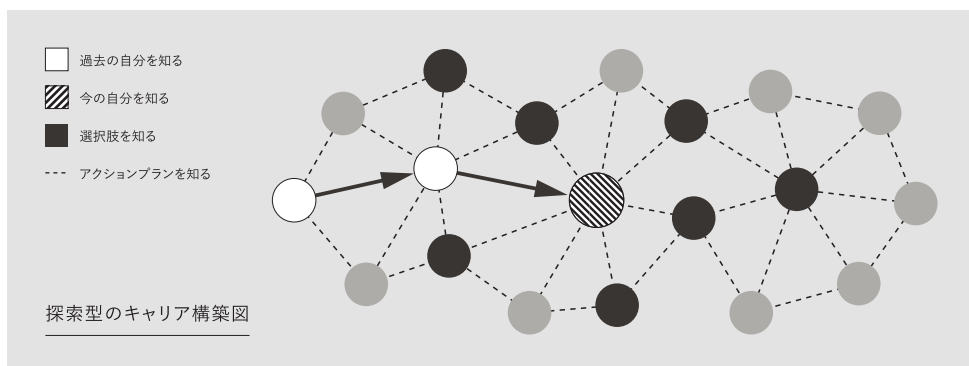
やるべきことを絞ることで、ゴールに向かって着実に進んでいる実感を得られます。一方で、長期で定めたゴールが不変であることが前提のため、外的環境や、求められるスキル・技術・役割などが目覚ましく変化するITエンジニアにとっては、「逆算型」でキャリアを設計することは難しいです。

また、長期の目標設計を行うことが前提となるため、「そもそも長期で成し遂げたい目標とは何か」に悩んでしまい、「キャリア迷子」に陥りやすいリスクもあります。



## 地図を持って、「探索型」のキャリア設計を行う

「探索型」のキャリア構築は、RPGで例えるなら、行く先々でイベントが起こる「フリーシナリオ型」と言えます。無作為に短期の目標だけを追い続けるのではなく、キャリアの地図の全体像を知っておき、経験を一つ一つ積みながら、さらに一歩先の目標を明確にしていく、というプロセスが大事です。



これまで見てきたように、ITエンジニアは変化に対する適応力が個人に求められ、市場を予測して将来的に競争力のあるスキルや知識などを身につけていく必要があります。時には流され、時には戻るといった選択も取りながら、キャリアの地図の中で進路を決定していきます。他の人のキャリアの軌跡も参考にしながら、ロールモデルを複数想定しておくことも重要です。

### COLUMN 「弱い紐帯」の強みを活用する

「弱い紐帯」とは、強い結びつきを持たないものの、異なるネットワークをつなぐ関係を指します。強い紐帯(家族や職場の同僚など)は安心感をもたらしますが、得られる情報は限られがちです。一方、カンファレンスやミートアップ、SNSでのつながりといった「弱い紐帯」は、新しい学びの機会をもたらし、キャリアの可能性を広げます。イベントでの何気ない会話が、新たな仕事のオファーやプロジェクトのきっかけになることもあります。

最新の技術や市場の動向をキャッチするために、会社内にとどまらないつながりを意識的に広げることで、スキルアップの機会やより良いキャリアの選択肢を得られます。積極的にイベントやコミュニティに参加し、「弱い紐帯」を活かすことが、長期的な成長につながります。

# 4. キャリアを考えるための「3つの"知る"」

## 1 今の自分を知る

まずは、経験・思考の棚卸しとして、自分ができること、技術を用いてこれまで向き合ってきた課題を言語化することが大事です。そのために、レジюме(職務経歴書)を書くことでキャリアの棚卸しを行い、客観的な第三者からアドバイスやフィードバックをもらうことをお勧めします。

経験や思考の棚卸しだけでなく、自分の欲求がどこから湧いているのかを整理することも重要です。キャリアアドバイザーやキャリアコーチからの問いかけなどをもとに、自分が成し遂げたい欲求がどこから生まれているのかを探ることもお勧めです。

## 2 選択肢を知る

自身のキャリアの棚卸しと欲求の源泉を確認したら、次はどのようなキャリアの選択肢があるのかを知ることが大事です。他のITエンジニアのキャリアの軌跡も参照しながら、自身にとってのロールモデルを見つけることや、次に習得すべきスキル/経験と、それらを得られるであろう機会や場所を見立てていきます。

身近な人やITエンジニアのキャリアに詳しいキャリアアドバイザーに相談することで得られる気付きもあります。また、技術カンファレンスやミートアップなど、技術コミュニティでのネットワーキングによって、知識や経験を習得していくという選択肢も有効となります。

## 3 アクションプランを知る

選択肢が見えたら、あとは具体的な道筋を立てていきます。必ずしも現職からの転職が最適ではなく、物理的移動(転職・異動や複業など、組織を超える移動)もあれば、心理的移動(自己学習やコミュニティへの参加など)が適切な状況もあります。転職は、これらの移動の中で最もドラスティックな変化をもたらす、大きな決断を伴う選択であるため、転職において得るものと失うものを認識しながら、意思決定を行う必要があります。

この成功確率をあげるための情報を集め、戦略的に転職活動を行うために、先駆者や専門家からの客観的なアドバイスを得るということも有効な手段の1つとなります。

PICK UP



## キャリアのプロへの相談と レジュメフィードバック。

転職ドラフトでは、いますぐ転職する予定がない方に向けて、長期的なキャリア設計の壁打ちを行っています。ITエンジニアキャリアに精通したアドバイザーとの面談で、今後のキャリアの考え方や選択肢、技術動向のデータなどをご紹介します。\*

また、これまで1万件以上のITエンジニアのレジュメをフィードバックしてきた専門チームが、提出されたレジュメに対して無料でフィードバックをお返ししています。第三者からのフィードバックを受けることで、キャリアの棚卸しをすることができます。

※転職ドラフトエージェントが提供するサービスとなります。

PICK UP



## 公開レジュメから ロールモデルを探す。

転職ドラフトでは、どのような人が、どのような企業から、どのような評価を受けているかを確認することができます。一般的に他人への評価を知るといった機会はほとんどありません。ゆえに世の中における実力と評価における適正値を詳らかにしていくことを目的とし、これらの情報を可能な限り公開しています。

自分に近いキャリア、または次に進みたいキャリアのエンジニアを検索して、レジュメの内容を読んでロールモデルを探したり、その人がどんな経験を積んでいるかを見てみましょう。

PICK UP

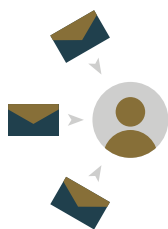


## カンファレンスや イベントに参加する。

コミュニティへの参加は、学びや機会を得る重要な手段のひとつです。業界の第一線で活躍するエンジニアの知見を得ることで、キャリアのヒントを得られます。また、先駆者のターニングポイントにおける意思決定を知ること、自身がとるべき行動への示唆にもつながります。

転職ドラフトでは、カンファレンスやイベントのスポンサーとして、エンジニア同士の交流を支援しています。こういった機会から、具体的なアクションプランを探してみましょう。

# 5. 「転職ドラフト」でキャリアを探索する



企業からのスカウトで、高年収・好条件に出会える。

## 転職 **DRAFT SCOUT**



これまでのプロジェクト経験やスキルをレジュメに記載すると、企業から直接、年収とミッションが提示された指名が届きます。記載いただいたレジュメに対して、専門チームが無料でフィードバックを行うため、キャリアの棚卸しをすることができます。自身の市場価値を、企業からの年収提示で確認してみましょう。



キャリアのプロ相談で、想像を超えた仕事に出会える。

## 転職 **DRAFT AGENT**



ITエンジニアの市場動向を熟知したエンジニアキャリアのプロとの相談を通して、充実した転職活動を効率的に行うことができます。最新データと理論に基づいたキャリア相談で、今後の選択肢とアクションプランを提案します。専門チームからレジュメの無料フィードバックもあります。



ITエンジニアの“選択”に向き合う。

## LIFE **DRAFT**



時代を代表するITエンジニアの方々へのインタビューを通して、キャリアにおける岐路の内実や、そのとき表に出せなかった葛藤を紹介していきます。エンジニアキャリアのロールモデルとして、またエンジニア業務を超えた考え方や生き方の物語として、お読みください。

## COLUMN 「市場価値」は一つではない

年収は個人の属性ではなく、仕事内容(ジョブ)に紐づくものと考えられるようになっていきます。そのため、同じスキルや経験を持つエンジニアでも、所属する企業の業界・ビジネスモデル・利益率・技術的課題の難易度によって、評価や報酬の水準は大きく異なります。

転職ドラフトでは、こうした複合的な評価こそが、本来の市場価値を知る鍵になると考えています。そのため、企業から提示されるのは金額だけでなく、「何を任せたいか(ミッション)」が同時に提示されます。

これにより、単なる報酬比較ではなく、キャリアの成長機会も踏まえたマッチングを可能にしています。



転職 **DRAFT**